

家族のライフスタイルに
合わせた庭づくりを

住宅取得にまた強い味方
「贈与税減税」

キニナルマドリ
住まいは巢まい
住まい文化の菜
住健住康
HABITAな風景
Green Earth

畑つき住宅は最高のぜいたく

ロシアの「ダーチャ」に学ぶ

ロシアに「ダーチャ」と呼ばれる市民が所有する畑があるのをご存知でしょうか。

畑つきセカンドハウスのようなものですが、都市に生活する家族の半数が持ち、平均的な規模は600㎡程度

です。1997年の統計によるとロシア全体では2,200万世帯がダーチャを所有し、その総面積は約182万haにのびます。

その威力はロシアにおけるジャガイモの90%、果物の77%、野菜の73%がダーチャでつくられている、ということでも明らかです。



Weekly HABITA⁰⁰³

土との触れ合いは生活の原点

大都市への人口集中が90%を超える日本ですが、その都市住民の間で野菜づくりなど“農のある生活”を求める声が強まっています。

とくに、リタイア期に入った団塊世代の人々にとって、田園風景や土との触れ合いは子どもの頃からの故郷での原体験としてインプットされており、それがリタイアと共に、田舎暮らしを求める動きと結びついています。

また、30歳～40歳代のファミリー層も、豊かな自然のなかで子育てをしたい、という希望がふえています。

子どもたちが畑づくりを通じて土をいじり、野菜を育て、自然からの恩恵を受けることを体感して学ぶことの効果は測りしれません。子どもにも押し寄せるストレスの解消はもとより、自らの手で肥料や水をやって育て、収穫することの喜びは、食べ物への感謝へと向かうことになるはずです。

また、収穫した野菜などを家族はもちろん、近所の人たちと一緒に食べることでコミュニケーションの輪

が広がります。ヨーロッパなどキッチンガーデンを持つ人々にとって、収穫した野菜などを持ち寄っての収穫祭は地域の人々の大きな楽しみの行事のひとつです。

究極の地産地消

農水省の調査によると田舎暮らしをした都市住民の動機はなかでも多いのが「家庭菜園・ガーデニング」であり、敷地に関して最も多い要望も「家庭菜園が楽しめる広さ」です。

ただ、田舎暮らしといっても、地方に完全に移住するケースはまだ少ないようです。やはり通勤型といわれる畑づくりができる郊外の戸建て住宅への住み替えが多いのです。

最近では、こうした要望に対し、都市近郊の市町村が市民農園を整備する動きも目立ちます。わが家だけでは物足りないという人たちに、市民農園をつくり開放しようというのです。農水省の調べだと、市民農園の開設数は、1993年に1,039だったのが、2007年には3倍の3,273にふえています。各市町村では、野菜づくり

の連が崩壊し、ロシアに体制が変わったとき、人々の給料は半年から1年も遅配しましたが、経済的な大きな混乱は起こりませんでした。市民が飢え死にしたという話はありません。ダーチャによって自ら食べていくことができたからです。食料自給率が40%を割る日本だったら大変なことになっていたでしょう。

ロシアに限りません。ヨーロッパには、この“農のある暮らし”についての長い歴史があります。「すべての暮らしは台所から」といわれ、「キッチンガーデンのない住宅は住まいとはいえない」が常識です。

フランスの国立統計研究所によると「庭なしマンションに住む家族3軒に1軒がキッチンガーデンを持ち、家族が年間消費する野菜の25%を自給する」といいます。

ドイツでも有名なクラインガルテン（市民菜園）は100年以上の歴史を持ち、自給自足的な生活がライフスタイルとして根付いています。

こうした畑づくりがいま、日本の都市住民の間でも盛んになろうとしています。雇用不安や不況対策の側面もありますが、土に触れる心豊かな暮らしへの想いが、田舎暮らしや畑つき住宅への関心になっているのです。

米国のミシェル・オバマ大統領夫人が先き頃、ホワイトハウスの一角に小学生と一緒に野菜の苗を植えたことが話題になりました。これを契機に米国では家庭菜園の人気が高まるとの見方が出ています。

の指南の体制も組んでいます。

面白いのは、農業体験と一口にいうのではなく、園芸療法、学童農園、福祉農園—という形での色分けもしていることです。農がどれだけ多くの効用を持つかの証しのひとつともいえるでしょう。

わが家で作る野菜は、まさに地産地消の最たるものであり、どこにも負けない最高のブランド品であり、偽装のない最高の安全食です。もちろん、不況で多少の給与ダウンでも、食うには困らないよ、とチョッピリ胸も張れます。

畑仕事のできる住宅は、ある意味、最高のぜいたくな住まいづくりかもしれません。

ロシアのダーチャについて、こんな話があるそうです。

「預言者は地球の破局を告げたが、それを思いとどませたのはダーチャで働いている人たちだったというのです。彼らは機械を使わず、小さな菜園を自分の手で耕しています。地球に丁寧に触れ、愛を注いでいます。その思いやりのある暖かい手を感じ、預言者は地球の最後の破局を思いとどめたのです」。